

不定詞文について

——二項対立原理との関連において——

加 藤 敏

R. Jakobson は「ロシア語動詞の構造について」という論文で、ロシア語動詞における諸形式の体系を、無標項と有標項からなる二項対立（以下、単に「二項対立」と記す）の原理によって説明している。本稿における私の目的は、この二項対立の原理の有効性を、不定詞とそれ以外の形式の対立という具体例において確認することである。

二項対立

二項対立においてどちらの項を有標であるとするかという基準が、W. Croft によって類型論の立場から、①構造的基準、②行動的基準、③頻度的基準の三つとされている (Croft: 64-94)。①の構造的基準とは、対立する二つの項を比較して形態素の多い方を有標項とみなすというものであり、ロシア語動詞の形態論的体系においては、例えば非 -ся 動詞（無標項）と -ся 動詞（有標項）の対立に見られる (Jakobson [a]: 7/59)¹。有標項は無標項より -ся という形態素を一つ多く持つのである。ただし Croft はこの構造的基準よりも他の二つの基準をより重要なものとみなしている。

②の行動的基準はさらに二つに分けられている。一つが屈折的行動的基準であり、もう一つが分布的行動的基準である。前者の屈折的行動的基準とは、対立する二つの項において、屈折変化形の多い方を無標項とみなすというものである。Croft の挙げている非常にわかりやすい例は、英語の三人称の人称代名詞における数のカテゴリーである。単数には he, she および it という三つの形態があるのに対し、複数にあるのは they のみである。そこで前者が無標項、後者が有標項ということになるのである。ロシア語動詞の中にこの例を探ると、例えば、体の対立にそれを見出すことができる (Jakobson [a]: 6/58)。無標項である不完了体動詞には時制が過去、現在、および（合成によるものではあるが）未来とい

¹ 紛密には、「非他動性を告示する形式」という表現によって Jakobson の念頭に置かれているのは、-ся 動詞ではなく、-ся 動詞の活用諸形式 (продаваться, продается, продающийся...) および他動詞の受動分詞の諸形式 (продаваемый, проданный) であり、そしてこれらが非 -ся 動詞の活用諸形式 (受動分詞の諸形式を除く: продавать, продает, продающий, продавший...) と対立しているとされているのである。

なお、カッコ内で斜線の直後に示されているのは、邦訳における該当ページである。

う三つの時制があるのに対し、有標項である完了体動詞には、過去および現在という二つの時制しかない。

次に分布的行動的基準とは、対立する二つの項において、より多くの環境において現れる方を無標項とするものである。Croft の挙げた例を簡略化して示すことにする。英語の能動態と受動態という対立において、目的語が再帰代名詞であるという環境で、能動態は可能であるが、受動態は不可能である。つまり、*My brother bought this cabin* と *This cabin was bought by my brother* は共に可能であるが、*Fred killed himself* は可能であっても、**Himself was killed by Fred* は不可能である。このことから能動態が無標項、受動態が有標項と言えるわけである。これに相当する例をロシア語動詞の中から探すと、例えば、分詞（副動詞および形動詞）における対立にそれを見出すことができる。Jakobson によると、能動分詞においては無標の能動分詞（能動形動詞）に対して有標の副分詞（副動詞）が、受動分詞においては無標の受動分詞（被動形動詞）長語尾形に対して、有標の同短語尾形が、述語性を告示する形式として対立しているとされている（Jakobson [a]: 13/65-66）。実際に無標項である能動分詞（читающий, прочитавший）と受動分詞長語尾形（читаемый, прочитанный）は、修飾語的にも述語的にも使われるのに対し（читающие в библиотеке студенты...; студенты, читающие в библиотеке,...），副分詞（читая, прочитав）と受動分詞短語尾形（читаем, прочитан）は述語的に使われるのみである（читая в библиотеке, студенты...）¹。以上をまとめると、Croft によって行動的基準と名付けられているもののうち、屈折的行動的基準は形態論的行動的基準と、分布的行動的基準は統語的行動的基準と言い換えることができるかもしれない。

③の頻度的基準とは、文字どおりの意味であり、テキストの中に、より多く現れるものが無標項であるという基準である。簡単に言ってしまえば、日常的により多く使われるものが無標項であるというわけである。この意味でこの基準は私たちの直観に反しないものである。ただしこの基準の適用は実際にテキストの中に現れた対立項の数を数えるという作業を前提にしており、この基準は構造的基準および二つの行動的基準が言語そのもの中に見出されたのとは性質を異にしている。本稿ではこの基準は考慮の対象から除外する。

さて、Jakobson が挙げたロシア語動詞における複数の二項対立の中で、有標項および無標項の分配が①および②の基準に合致していないように見えるものがいくつかある。その一つが不定詞（無標項）と不定詞以外の形式（有標項）の二項対立である。Jakobson によって、不定詞以外の形式（定形および分詞）は不定詞に有標項として対置されている

¹ 同様の例は形容詞の長語尾形と短語尾形の対立に見ることができる。つまり、長語尾形は述語としても修飾語としても用いられるのに対し、短語尾形は述語としてのみ用いられる。この意味において、分布的行動的基準によるなら、長語尾形が無標項であるのに対し、短語尾形が有標項ということになる。

(Jakobson [a]: 7/60)¹。不定詞に対して不定詞以外の形式は「統語的関係の存在」を告示する有標項とされているのである。ところが、不定詞とそれ以外の形式の対立において不定詞が無標項であることは、①および②のいずれの基準によっても説明がつかない。不定詞（чита-ть）とそれ以外の形式（чита-л, читай-у, читай,...）では、どちらが形態素を多く含んでいると言うことはできない。ゆえに①の構造的基準は適用不可能である。また、変化形の数から判断するなら、有標項とみなされるべきは不定詞の方であり、屈折的行動的基準は無標/有標の決定においては適用不可能である。不定詞には一つの形態があるのみであるのに対して（читать），不定詞以外の形式には多くの形式が数えられるのである（читал, читаю, читай...）。また、不定詞とそれ以外の形式は範例論的関係にあるというよりは、どちらかというと連辞論的関係にあるが、分布的行動的基準が適用されるためには、二つの対立項が範例論的関係にある必要があり、このため分布的行動的基準も適用不可能である。ある事象を表現するときに、例えば、不完了体動詞と完了体動詞との間で選択が行われるということはあり、現在形と過去形の間で選択が行われることもある。このとき不完了体動詞と完了体動詞、現在形と過去形は範例論的関係にあると言えることができる。一方、不定詞とそれ以外の形式の間で選択が行われるということは稀である。それよりも不定詞とそれ以外の形式は一文の中に共起するというのが普通である（Люблю читать; Хочу читать）。つまり、不定詞とそれ以外の形式は主に連辞論的関係にあるのである。したがって、②の屈折的行動的基準も分布的行動的基準も、不定詞とそれ以外の形式の二項対立における無標/有標の決定には適用不可能ということになるのである。

それでもこの二項対立における無標項と有標項の配分について、直観的に Jakobson は正しいように私には感じられる。そこで、以下において私は不定詞の本性について考察したいと思う。その際、私は不定詞文に注目する。不定詞は一般的に文中の他の要素に依存して現れることが多いが（Люблю читать; Надо читать; Интересно читать），不定詞文においては不定詞は剥き出しの姿で現れ、その意味で不定詞の本性を観察するには適していると仮定することができるからである。

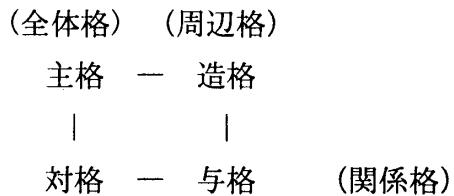
不定詞文（不定詞および与格）

私はここで不定詞を語彙的意味のみを表示する形式と、言い換えるなら、不定詞の全体的意味を動作・状態の単なる名指しと規定する。不定詞のこの性質は一般的に認められている。例えば、『Русская грамматика』では、不定詞は「動作の名指しのみを行い」、人称、数、時制、現実性あるいは非現実性の表示に関わらない形式と規定されている（«Русская

¹ 定形とは直説法の諸形式（現在形および過去形）および命令法の諸形式である。

grammatika», т. 1: 674)。

さて、形態論から統語論へ、不定詞から不定詞文へ移ることにする。不定詞の全体的意味が、単なる動作・状態の名指しであるなら、不定詞文の意味構造はどうなるのであろうか。不定詞文の意味構造を考えるとき、避けて通れないのが、名詞や代名詞の与格であろう。ここでもやはり Jakobson が参考になる。Jakobson は別の論文で、与格を主格、対格および造格との対立において捉えて提示している (Jakobson [b]: 31-37/80-87 および 45-58/94-109)。Jakobson によるこれらの格形式の規定は以下のとおりである。無標項の主格に対し、対格は「何らかの行為がその対象に向けられていることを告示」する有標項として対立している。これと完全な並行関係にあるのが、造格と与格である。無標項である「対象自身が何らかの活動行為を遂行する [...] のかそれともしないのかについては何も述べない」造格に対し、与格は「表示対象が何らかの動作行為を受けることを指示」する有標項として対立している。また、無標項の「全体格」である主格および対格に対し、造格および与格は「周辺格」として、「発話の意味内容全体において周縁的な位置を占めることを指示する」有標項として対立している。周辺格である造格と与格は、「発話内における中心内容の存在を前提とし、その規定に参加する」のである。これをまとめると、以下のようなになる（それぞれの対立において、上および左が無標項である）。



このように与格は造格と同様に与格対象が発話内容において「周辺的地位」を占めることを表し、また、対格と同様に「動作行為を受けることを表示する」わけである。要約して言うなら、与格は「間接的対象」あるいは「副次的対象」を表すということになる。以上を確認した上で Jakobson は与格の個別的意味を見るのであるが、その一つで実際の行為主が事象の「受け取り手」として感じられる場合を挙げている。Jakobson はこの場合をさらに二つに下位区分している。その一つが「事態状況が経験者の能動性とは独立したものとして経験される」場合であり、もう一つが不定詞文である。前者では、*Больной почувствовал себя лучше* に対する *Больному полегчало*, *Я не сплю* に対する *Мне не спится* の与格がその例である。いずれの例においても、主格対象は事象の発生源とも「受け取り手」であるとも明示されず、与格を含む文との対立によって初めて動作・状態の能動的な発生源であることが表されるのに対し、与格対象は動作・状態の「受け取り手」であることが積極的に表されていると言うことができる。不定詞文における与格も同じことが言え

る。つまり、主格が使われる文において、与格が用いられている文と対比されることにより、主格対象が事象を能動的に発生させている、あるいは主格対象が自らの動作・状態を主体的に支配しているということが示されるわけであるが（Мы поедем），与格が用いられると、動作・状態が与格対象によって受け取られるということが表される（Нам поехать）。不定詞文における与格は、あくまでも動作・状態の「受け取り手」なのである。主格対象が動作・状態を主体的に支配しているということは、動詞の形が主格に一致するということに形態論的な表現となって現れているのに対し、不定詞文においてはそのような一致は起こらない。不定詞文における与格の意味に関する Jakobson の説明をそのまま引用する。「不定詞によって表された動作行為が予め規定済みの、そもそも最初から指定されたあるいは忌避されたものとして描出され、それに応じて与格対象は、命令または禁止の、あるいは運命の警告の受け取り手とみなされる」（Jakobson [b]: 54/105）。

ところで、引用されたばかりの Jakobson の説明をもう一度よく見てみたい。彼は「不定詞によって表された動作行為」は「予め規定済みの、そもそも最初から指定されたあるいは忌避されたものとして描出」と書き、それに続けて「それに応じて」与格対象が動作・状態の「受け取り手」となるとしている。ここで考えておきたいことは、Jakobson の説明の、「それに応じて」を挟んだ前半部分と後半部分の関係である。不定詞が Jakobson によって述べられているような特徴（「予め規定済みの」および「そもそも最初から指定されたあるいは忌避された」という）を持った動作・状態を表すということと、与格が「受け取り手」を表すということの関係である。Jakobson の書き方は、前者がまず前提として存在し、その前提を受けて後者が生じるという理解を生じさせるように思われる。しかし、私にはここでは因果関係を認めない方が、より事実に近いように思われる。不定詞が Jakobson の言う特徴を本来的に有しているわけではないことは、既に見たとおりである。 $N_{dat-inf}$ という構造を持った不定詞文において、つまり与格を含む不定詞文において、不定詞が先の特徴を持つようになるのは、あくまでも与格との相互作用の結果であるとみなすべきである。後で見るとおり、不定詞の全体的意味は単なる動作・状態の提示であり、そこに「受け取り手」を表す与格が併置されることにより、不定詞の動作・状態が与格対象に与格対象の外側から付与されるということが明示され、その結果として「予め規定済み」などの特徴が現れるのである。

ところで、具体的な実例の分析に移る前に、いくつかの小さな問題を片付けておくことにする。例えば、現在形と過去形の二項対立と、不定詞とそれ以外の形式の二項対立には、Jakobson にあっては決定的に異なる点がある。Jakobson は前者の二項対立における過去形（有標項）を、「動作が過去に属することを告示する」形式と規定しているのに対し（Jakobson [a]: 8/61），後者の二項対立における不定詞以外の形式（有標項）を「統語的関係の存在を告示する」形式と規定している（Jakobson [a]: 7/60）。つまり、前者の規定は意

味論的であるのに対し、後者の規定は統語論的規定となっているのである。一体、不定詞とそれ以外の形式の二項対立を意味論的に規定することは不可能なのであろうか。また、不定詞に関連して、しばしば叙法性について語られることがある（例えば、中澤：257）。それは何故か。この二つの疑問について以下で簡単に考察する。

まず確認しておくべきことは、不定詞以外の形式は、語彙的意味の他に、叙法、時制、数および人称の表示を行うということである。私は不定詞との対立を念頭に置き、不定詞以外の形式が叙法（наклонение）の表示を行うことを強調したい。それは不定詞以外の形式では、まず直説法（無標項）あるいは命令法（有標項）のカテゴリーが表示され（Jakobson [a]: 8/60-61），その次に時制などの文法的特徴が示されるからである。そもそも叙法のカテゴリーは「動作の現実への関係」を表示するものである（«Русская грамматика», т. 1: 618-619），不定詞以外の形式は、それが文の中で使われるとき、「伝達内容の現実への関係」（«Русская грамматика», т. 2: 214）の存在、つまり叙法性（модальность）の存在を表示するのである。単純化して話を進めてしまうが、例えば、прочитала という形式（および Нина прочитала этот текст という文）は、女性である人が発話時よりも前に動作を実現したということが事実であることを示しているわけであり、また、прочитай という形式（および Нина, прочитай этот текст という文）は、動作の実現が要求されているということを表している。それに対し、不定詞は語彙的意味以外の何ものも表しはしない。さて、一般的に言って、しばしば無標項は一定のコンテキストにおいて有標項の代わりに用いられることがある（Jakobson [a]: 14/66-67）。つまり、例えば、現在形は過去形の代わりに使われることがあるのである。以上のすべてが意味しているのは次のことである。つまり、他の形式に対して無標項である不定詞は、様々な場面で用いられるとき、叙法性を表示することがあり得るということである¹。ちなみに、B. Виноградов は「動詞のすべての基本的な叙法の機能で、それ（=不定詞）が使われることが可能なのである」と言っている。

¹ 叙法性と表現した概念はさらに詳しく分析する必要があるが、本稿ではこれに立ち入ることはせず、暫定的に同概念を「伝達内容の現実への関係」と規定しておくことにする。一般に叙法性はこの規定に加え、「話し手の伝達内容への関係」と規定されるように思われる（«Русская грамматика», т. 2: 214）。けれども「現実」の概念にコンテキストと並んで話し手および聞き手も含まれるとみなすなら、「話し手の伝達内容への関係」も「伝達内容の現実への関係」の中に含まれることになる。例えば、直説法の形式が、伝達内容が現実のことであることを表すのと同様に、命令法の形式が、伝達内容が実現されることが要求されていることを表しているのと同時に、その要求が聞き手に向けられていることを意味しているとみなすことが可能であり、また、間投詞が、それが添えられた発話の伝達内容に対する話し手の態度を表していると解釈することもできるのである。私が叙法性の概念における「現実」の中に、言語活動における三要因——話し手、聞き手およびコンテキスト——を見ているのは、言語の基本的三機能の図式を意識したことであるが（cf. Bühler: 28-29/33, Jakobson [c]: 22-24/188-191），私が本稿で叙想性の概念を以上のようなものとみなしているのは、後で見るように、あくまでもロシア語の不定詞および不定詞文を理解しようとする際に好都合であるからであり、私には本稿で叙法性に関する見解を示そうという意図はない。

彼が挙げている例は、命令法の代わりに不定詞が使われる場合（Уволить! 「解雇だ」）や、直説法の代わりに不定詞が使われる場合（А он бежать 「彼はいきなり走り出した」）などである（Виноградов: 490-491）。また、Брицынは不定詞の本質を規定する特徴として、「叙法的に現実と相関せずに現象を表現すること」としている（Брицын: 194）。さらにプラハのアカデミーによる『Русская грамматика』では、不定詞文は基本的な統語論図式には含まれず、統語論図式にしたがって作られた文が実際に用いられるときに加えられる操作の結果、叙法性が加えられて生じたものであるとされている（『Русская грамматика』, Praha: 750-751 および 831-835）。注意しなければならないのは、不定詞が叙法性を本来的に有しているのではなく、不定詞文で叙法性が表示されるのは、不定詞とそれ以外の形式の二項対立が存在し、その二項対立の一方である不定詞が具体的な場面で用いられた結果であるということである。このように考えると、不定詞に対しそれ以外の形式は、意味論的に、何らかの叙法性を表示する形式と規定することができ、また、対立する項の一方が叙法性を表示する必然的な結果として、不定詞に関連して叙法性が問題になることがあるのである。

また、M. Брицынの言うとおり、個別的意味による不定詞文の分類は諸研究よって多様で、そこに一貫性は見られない（Брицын: 197 および 199）。つまり、不定詞文の、「義務」、「必要性」、「命令」などの個別的意味は、一部はロシア語研究の歴史に残る文法書において必ず挙げられていると同時に、一部は限られた研究においてのみ挙げられており、また、それぞれの文法書における分類方法も異なっている¹。不定詞文における個別的意味の分類は、あたかもそれぞれの文法家によって恣意的に、思いつくままに行われているようさえ思われる²。しかし、これはある意味で当然なことであると言うことができる。理由は以下のとおりである。

有標項が特定の意味を積極的に表示するのに対し、無標項はその意味に関しては何も表示しないというのが、二項対立理論の基本的な考え方である。例えば、有標項である過去形が、動作・状態が過去に属することを積極的に表すのに対して、無標項である現在形は時制に関しては特に何も表さない。現在形が発話時に進行している動作・状態を表したり、一般的な事実を示すときを使われたりするのは、あくまでも有標項である過去形と役割分担がなされている結果である。さらには、例えば、明らかに過去に属する歴史を記述する場合や、小説において現在形が用いられることがある。これはテキストが歴史の記述や小

¹ ここで私が念頭に置いているのは、Пешковский (381-385), Шахматов (81-83 および 103-111), «Грамматика русского языка» (44-55) および «Русская грамматика» (т. 2, 373-378) である。

² K. Тимофеев から（Тимофеев: 257-301），«Русская грамматика»までの不定詞文の分類の歴史が、Брицынによって与えられている（Брицын: 195-197）。ちなみに Тимофеев による分類は、ほぼそのままの形で «Грамматика русского языка» に受け継がれている。

説であるという状況設定がまずあり、それにより描かれている内容の時間的帰属先が著者も読者もわかっているのである、この状況設定の中であれば、時制に関して無標項である現在形も用いられることができるのである。反対に *погибнуть* という動詞が、未来における状況が語られているときに過去形で用いられると（Если он не вернется, мы погибли「もし彼が戻ってこなかつたら、私たちはおしまいだ」）、「客観的には未来の動作が、すでに起こってしまっているかのような形で提示される」のである（«Русская грамматика», т. 1: 633）。つまり、特定の意味を担っている有標項とそうでない無標項の対立が一方にあり、他方に、それが用いられる場面があるのであり、この二つの相互作用によって、個別的意味が決定されるのである¹。場面は無限であり、そのため個別的意味も無限にあり得る。もっとも、現実的には個別的意味はいくつかのタイプに分類されることになる。例えば、«Русская грамматика»においては、現在形（完了体のみ）、過去形（完了体および完了体）および未来形（完了体および完了体）という三分法が採られているが、そこでは現在形については 7 つ、過去形については 5 つ、未来形については 4 つの個別的意味（用法）が挙げられている（«Русская грамматика», т. 1: 628-636）。注意すべきことは、これらの個別的意味はあくまでも二項対立の関係にある現在形および過去形と、具体的場面との相互作用の結果によって作り出されるものであり、現在形および過去形のそれぞれの個別的意味は、それぞれの形式において、離散的でなく連続的、かつ閉じられた集合ではなく開かれた集合であるということである。つまり、例えば、現在形の [個別的意味 1] と [個別的意味 2] は必ずしも明確に区別されるものではなく、また現在形の [個別的意味 1], [個別的意味 2], [個別的意味 3], … [個別的意味 n] は無限にあり得るのである。

不定詞とそれ以外の形式をそれぞれ二項対立の無標項と有標項であるとし、それぞれに個別的意味があると仮定すると、不定詞にも複数の個別的意味があり得るということになる。そうであれば、この個別的意味は連続的かつ開かれた集合であることになる。そのような個別的意味を記述するときに、文法家の恣意がその記述に入り込むことは必然的であると言うことができるわけである。以上が不定詞文の記述における文法家の恣意性の理由である。

実例の分析

¹ «Русская грамматика»においても、時制の説明において、基本的意味と、場面における個別的意味という考え方方が採られている（«Русская грамматика», т. 1: 628-636）。ただし、そこでは二項対立の原理は取り入れられてはいらず、基本的意味（категориальное значение）は現在形、過去形および未来形のそれぞれに備わっていると考えられている。ちなみに、«Русская грамматика» では個別的意味は、コンテクストにおける「用法（употребление）」という表現によって表されている。

以下において、不定詞が文の主要成分となっている不定詞文の実例を見ながら、不定詞が本来はあくまでも動作・状態の名指しを行うのみであり、不定詞文に様々な個別的意味が生じるのは、与格や場面その他のとの相互作用の結果であるということを見てゆくことにする。

分析に用いられるのは、チェーホフの四大戯曲の中で使われた不定詞文の全用例である¹。 *бы* および疑問詞を含む不定詞文は、分析から除外されている。私の本来の目的は、二項対立の原理の正しさを、不定詞と不定詞以外の形式の対立において確認することであった。したがって、不定詞文についての考察を行うのは、不定詞が剥き出しの形で文の中心を担うからである。一方、*бы* および疑問詞がある場合、不定詞は完全に剥き出しの形で現れているとは言い難い。

最初に私の仮定、つまり不定詞はあくまでも動作・状態そのものを提示するのみであることを示す例を見て(1)、その後に、不定詞文の様々な個別的意味が具体的な場面において、不定詞と与格との併置によって生じるものであるという仮定を証明する用例を見ることがある(2)。そして最後に、文法書でよく触れられる個別的意味を伴った不定詞文の用例を整理して列挙することにする(3)。

(1) 不定詞の基本的意味

まず、不定詞があくまでも動作・状態そのものを提示するのみであることを示す用例を示す。下線の施された *обратить* および *купить* は、すでに言わわれていることを繰り返しているわけである。特に *обратить* の使われ方は示唆的である。屋敷と土地を売り払ってしまうと提案するセレブリヤコーフは、最初は *обратим* を使い、行為が行為者による主体的なそれであることを示しているのに対し、ヴォイニツキーに尋ねられて答えるときには、不定詞を用いている。これは、聞き返されたときに重要なのは、行為の内容を明確にすることであり、それ以外の、時制や人称などの文法的特徴によって生じる情報は不要であるためであると考えることができる。不要な情報を含まない、動作・状態のみを示す不定詞が用いられているのである。[Серебряков] Я придумал одну такую меру и имею честь предложить ее на ваше обсуждение. Минута детали, изложу ее в общих чертах. Наше имение дает в среднем размере не более двух процентов. Я предлагаю продать его. Если вырученные деньги мы обратим в процентные бумаги, то будем получать от четырех до

¹ チェーホフの引用の出典は *Чехов А. П. Сочинения. Т. 13: Пьесы 1895-1904. М., 1978.* 引用後のカッコ内に、作品名、幕、出典におけるページが挙げられている。作品名は Ч.:『かもめ』、Д. В.:『ワニヤ伯父さん』、Три с.:『三人姉妹』、Виш. с.:『桜の園』。日本語訳は原則として神西清訳『かもめ・ワニヤ伯父さん』および『桜の園・三人姉妹』(ともに新潮文庫)を用いているが、句読法および必要と思われる部分は大幅に変更されている。

пяти процентов, и я думаю, что будет даже излишек в несколько тысяч, который нам позволит купить дачу в Финляндии. [Войницкий] Постой... Мне кажется, что мне изменяет мой слух. Повтори, что ты сказал. [Серебряков] Деньги обратить в процентные бумаги и на излишек, какой останется, купить дачу в Финляндии. (Д. В., 3: 100) [[セレブリヤコーフ] については、ふと次の方法を思いついたので、ひとつ皆さんのご審議をわざらわしたい。細かい点は抜きにして、大づかみに説明することにしますが、まずこの地所は、平均して二分以上の利を上げてはいない。そこでわたしは、これを売り払うことを提案したい。その代金を有価証券へ振りかえれば、四分ないし五分の利をあげることができるわけだし、わたしの考えでは、何千かの余分の金も浮いてくるはずです。それがあれば、フィンランドあたりに、小じんまりした別荘も買えようというものです。[ヴォイニツキー] ちょっと待った…。どうも僕は耳が悪くなつたようだ。もう一ぺん言ってください。[セレブリヤコーフ] 代金を有価証券へ振りかえて、残った余分の金で、フィンランドに別荘を買う、というのです]。

次の3例も同様で、それぞれ状態および行為が名指されているのみである。これらの例においては、いかなる付加的な意味も表現されていず、ひたすら語彙的意味が提示されているのである（ただし、二つめの例は省略符号が示しているとおり、何らかの語が省略されていると考えることもできる）。[Маша] Мне кажется, человек должен быть верующим или должен искать веры, иначе жизнь его пуста, пуста... Жить и не знать, для чего журавли летят, для чего дети рождаются, для чего звезды на небе... Или знать, для чего живешь, или же все пустяки, трывн-трава. (Три с., 2: 147) [[マーシャ] わたし、こう思うの、人間は信念がなくてはいけない、少なくとも信念を求めるなければいけない、でないと生活が空虚になる、空っぽになる、とね…。こうして生きていながら、何を目あてに鶴が飛ぶのか、なんのために子供は生まれるのか、どうして星は空にあるのか、こういうことを知らないなんて…。なんのために生きるのか、それを知っているか、何もかもくだらない根なし草になるかよ]; (Андрей и Ферапонт входят.) [Ферапонт] Бумаги подписать... [Андрей] (Нервно.) Отстань от меня! Отстань! Умоляю! (Уходит с колясочкой.) (Три с., 4: 179) [(Андрей) (アンドレイ) フェラポント登場) [フェラポント] 書類に署名を…。[Андрей] (Ферапонту сердито.) Что тебе? [Ферапонт] Чего? Бумаги подписать. [Андрей] Надоел ты мне. (Три с., 4: 182) [[Андрей] (フェラポントに) なんの用か? [フェラポント] なんの用かって? 書類に署名ですよ。[Андрей] お前にはあきあきしたよ]。

次の例は兄ソーリンが妹アルカージナに、アルカージナの息子について話している部分である。この例では後で挙げられる「願望」が表されているとも、また、不定詞 поехать は не мешало бы を受けているとも解釈できるかもしれない。しかし、発話者はここでは

甥にとらせるべき行動の一例を提示しているのみであると解釈することも可能であろう。

[Сорин] (Насвистывает, потом нерешительно.) Мне кажется, было бы самое лучшее, если бы ты... дала ему немного денег. Прежде всего ему нужно одеться по-человечески и все. Посмотри, один и тот же сюртучишко он таскает три года, ходит без пальто... (Смеется.) Да и погулять малому не мешало бы... Поехать за границу, что ли... Это ведь не дорого стоит.

(Ч., 3: 36) [[ソーリン]] (口笛を鳴らし, やがてためらいがちに) わたしはね, いちばんの上策は, もしもお前が…あの子に少しばかり金を持たしてやつたらどうかと思うよ。何はさておき, あの子も人並の身なりはせにやならんし, とまあいった次第でな。見てごらん, 着たきり雀のぼろフロックを, これでもう三年ごし引きずって, 外套も着てない始末じやないか…。(笑う) それに若い者にや, 少し気晴らしをさせるもよかろうて…。ひとつ外国へ行くなんていうのはどうかな…。なあに, 大して金もかかるまい]。

次の台詞は非常に強い動搖のもとで発せられているものである。これも後で見る「願望」に含めるよりも, 激しい感情の中で発せられた, 行為そのものの名指しであると理解する方がよいように思われる。カッコ内の説明 судорожно жмет Астрову руку および плачетからヴァイニツキーが強い感情に支配されていることがわかる。そのような場合, 発話者は, 言いたいことの中心となる語句を, 付加的な意味を担う文法的形式を付けることなく提示しようとするということは大いにあり得るであろう。

[Войницкий] О, понимаешь... (судорожно жмет Астрову руку) понимаешь, если бы можно было прожить остаток жизни как-нибудь по-новому. Проснуться бы в ясное, тихое утро и почувствовать, что жить ты начал снова, что все прошлое забыто, рассеялось, как дым. (Плачет.) Начать новую жизнь... Подскажи мне, как начать... с чего начать... (Д. В., 4: 108) [[ヴァイニツキー]] ねえ, 君…(ぐいとアーストロフの手を握って) わかるかい, セメテこの余生を, 何か今までと違ったやり口で, 送れたらなあ。きれいに晴れわたった, しんとした朝, 目がさめて, さあ新しく生活し直せるんだ, 過ぎたことはいっさい忘れた, 煙みたいに消えてしまった, と思うことができたら。(泣く) 新しい生活を始めるんだ…。君, 教えてくれ, 一体どうしたら始められるんだ…。どうしたらいいんだ…]。

さて, 次の2例は、「義務」あるいは「命令」を表す不定詞文の中に含めてもよいかもしれない。しかし, 私はこれらの不定詞を動作・状態の名指しのみを行っているものと理解したい。2例に共通するのは, 最初に漠然と対象を漠然と示しておき (それぞれ *так* および *правило*), その後でその対象の内容を具体的に示すという構造である。「義務」あるいは「命令」という意味は, あくまでもこの構造によってこの文に持ち込まれたものであると理解すべきである。つまり, *так* は直前のドールンの台詞 *надо продолжать* をさらに受けているわけであるが, この *надо* に「義務」や「命令」の意味があるのであり, 一方, *правило* にはそもそも語彙的意味に「義務」や「命令」の意味が含まれているのである。

[Дорн] Константин Гаврилович, мне ваша пьеса чрезвычайно понравилась. Странная она какая-то, и конца я не слышал, и все-таки впечатление сильное. Вы талантливый человек, вам надо продолжать.<...> [Треплев] Так вы говорите – продолжать? (Ч., 1: 19) [[ドールン] ねえコンスタンチン・ガヴリーロヴィチ君、僕は君の芝居が、すっかり気に入っちゃった。ちよいとこう風変わりで、しかも終わりのほうは聞かなかつたけど、とにかく印象は強烈ですね。君は天分のある人だ、ずっと続けてやるんですね。[…]) [トレープレフ] じゃあなたは言うんですね、続けると?]; [Аркадина] Евгений Сергеич, кто из нас моложавее? [Дорн] Вы, конечно. [Аркадина] Вот-с… А почему? Потому что я работаю, я чувствую, я постоянно в суете, а вы сидите всё на одном месте, не живете… И у меня правило: не заглядывать в будущее. Я никогда не думаю ни о старости, ни о смерти. Чему быть, того не миновать. (Ч., 2: 21) [[アルカージナ] …ね、エフグーニー・セルグーイチ、どっちが若く見えて? [ドールン] あなたです、もちろん。[アルカージナ] そらね…。で、なぜでしょう? それはね、わたしが働くからよ、物事に感じるからよ、しょっちゅう気を使っているからよ。ところがあんたときたら、いつも一つの所にじつとして、てんで生きちゃいない…。それにわたしには主義があるの、未来を覗き見しない、というね。わたしは、年のことや死のことも、ついぞ考えたことがないわ。どうせ、なるようにしかならないんだもの]。

また、次の例は不定詞文ではないが、今の2例と同様の構造を持っており、不定詞の素性を知る上で、興味深い例なので引用しておく。最初の例の不定詞 уходить は単に манера の定語であるとも考えられるが、манера からは独立しながら、その内容を詳しく示しているとみなすことも可能である。二つめの例における不定詞は нож の用途を具体化しているわけである。(Андрей машет рукой и отходит.) [Ольга] Он у нас и ученый, и на скрипке играет, и выпиливает разные штучки, одним словом, мастер на все руки. Андрей, не уходи! У него манера – всегда уходить. Поди сюда! (Три с., 1: 130) [(アンドレイが片手を振って、行こうとする) [オリガ] この人は、一家きっての学者ですし、バイオリンも弾きますし、いろんな細工物もしますし、まあ一口でいえば、多芸多才なんです。アンドレイ、行くんじゃありません! この人の癖で、すぐいってしまうんです。こっちへいらっしゃい!]; [Федотик] А для себя я купил ножик… вот поглядите… нож, еще другой нож, третий, это в ушах ковырять, это ножнички, это ногти чистить… (Три с., 2: 148) [[フェドーチク] 自分のも買いましたよ…ほら、ご覧なさい…大きなナイフ、もう一本ナイフ、それからもう一つ、これは耳を搔くやつ、この小さいはさみは、爪をきれいにする…]。

なお不定詞が使用説明書などにおいて用いられることがある。これも動作・状態の名指しの一種とみなしてよいように思われる。次の例は、登場人物の一人が新聞を声に出して読んでいる場面である。[Чебутыкин] При выпадении волос… два золотника нафталина на

полбутилки спирта... расторгнуть и употреблять ежедневно... (Три с., 122) [[Чебитойкин] 抜け毛には…ええと、ナフタリン八グラムをアルコール半瓶に…溶解し、これを毎日もちいる…]。

(2) 不定詞文における与格

次に、与格によって様々な個別的意味が不定詞文に持ち込まれるということを確認したい。典型的な例から始める。これは自分の将来について迷っているニーナが自分の憧れている作家トリゴーリンにくじ引きを頼む場面である。この不定詞文は後で見る「義務」を表しているとみなしてよいかもしれない。しかし、ここで重要なのは、「義務」という意味が生じるのは、不定詞と与格の併置によるということである。つまり、「女優になる」のはここではニーナの主体的な判断ではなく、不定詞に与格が併置されることによって、何かによってニーナに与えられたこととみなされるわけである。[Нина] (Протягивая в сторону Тригорина руку, сжатую в кулак.) Чёт или нечет? [Тригорин] Чёт. [Нина] (Вздохнув.) Нет. У меня в руке только одна горошина. Я загадала: идти мне в актресы или нет? Хоть бы посоветовал кто. (Ч., 3: 34) [[ニーナ]] (握り拳にした片手を、トリゴーリンのほうへさしのべながら) 偶数？ 奇数？ [トリゴーリン] 偶数。[ニーナ] (ため息をついて) いいえ。手の中には、豆が一つしかないの。わたし占ってみたのよ、女優になるべきか、ならないべきかって。誰か、こうしたらと言ってくれるといいんだけれど]。

それに対して、次の例は状況が異なる。これは既婚者であるエレーナ・アンドレーエヴァに対し医者のアーストロフが求愛する場面であるが、ここでも不定詞と与格の併置が起こっている。しかし、ここでは不定詞の表す動作を与格対象であるアーストロフに与えるのはエレーナ・アンドレーエヴァであろう。この不定詞文は、本来は不定詞文ではなく、дайте や позвольте が省略されているのかもしれない。しかし、重要なことは、もし仮にそうであったとしても、与格が「受け取り手」であることに変わりはないという点である。
[Елена Андреевна] О, я лучше и выше, чем вы думаете! Клянусь вам! (Хочет уйти.)
[Астров] (Загораживая ей дорогу.) Я сегодня уеду, бывать здесь не буду, но... (берет ее за руку, оглядывается) где мы будем видеться? Говорите скорее: где? Сюда могут войти, говорите скорее... (Страстно.) Какая чудная, роскошная... Один поцелуй... Мне поцеловать только ваши ароматные волосы... [Елена Андреевна] Клянусь вам... (Д. В., 3: 97) [[エレーナ・アンドレーエヴァ] まあ、あたしこれでも、あなたが考えていらっしゃるより、少しはましな女ですわ！ ええ誓って。(行こうとする) [アーストロフ] (行く手を遮って) 僕は今日すぐ家へ帰ります。もうしようちゅうここに来るようなことはしません。が、その代わり… (女の手を取ってあたりを見回す) どこかで逢いましょう。さ早く、どこで逢い

ましょう？ 誰かくるといけません、早く言って…。(情熱的に) その眼、その唇…。一度だけキスさせて…。そのいい匂いのする髪の毛に、ちょっとキスするだけでいいです…。[エレーナ・アンドレーエヴァ] あたし誓って…]。

次の例で与格は使われていない。あまり美しくないソーニヤは医者のアーストロフに憧れているのであるが、次の部分は彼女のことを念頭に置いてエレーナ・アンドレーエヴァが独り言を言う場面である。 поддаться および забыться という状態を担うのは、具体的にはソーニヤであるが、しかし、ここでは一般的に誰もが状態の担い手になると理解することも可能であろう。いずれにしろ、省略された与格で表されるべき人物が、 поддаться および забыться という状態の「受け取り手」であることは明らかである。なお、この例からは、以下で見る「不可避」の意味が感じられる。[Елена Андреевна] Я понимаю эту бедную девочку. Среди отчаянной скуки, когда вместо людей кругом бродят какие-то серые пятна, слышатся одни пошлости, когда только и знают, что едят, пьют, спят, иногда приезжает он, не похожий на других, красивый, интересный, увлекательный, точно среди потемок восходит месяц ясный... Поддаться обаянию такого человека, забыться... Кажется, я сама увлеклась немножко. (Д. В., 3: 93) [[エレーナ・アンドレーエヴァ] あたしには、気の毒なあの子の気持ちがよくわかる。どうにもやり場のない退屈なその日その日、あたりをうろうろしている連中ときたら、人間というよか、いっそ灰色のポツポツとでも言ったほうが、早わかりがするくらい。耳に聞こえる話といったら、俗悪なくだらない話ばかり、ただ食べて、飲んで、寝ることしか知らないような連中が、うようよしている中へ、時々ああして、ほかの連中とは似もつかない、風采もよければ話も上手で、女好きのするあの人人がやってくるんだもの。闇夜に明るい月がのぼったみたいなものだわ…。ぼうっとなって、無我夢中になるのも無理はない。現にこのあたしだって、幾分のぼせ気味らしいもの]。

(3) 不定詞文の個別的意味

次に不定詞文の個別的意味の分類を試みる。ただし既に指摘したとおり、この意味は本質的に非離散的、連続的なものであり、閉じた集合でもないので、その分類も完全なものとはなり得ず、私の個人的解釈が必然的に入り込んでしまっていることを断つておかなければならぬ。

不定詞文の個別的意味を分類するという作業を行うに際して、言語の三機能の図式をもとに、不定詞文の意味分類を三つに大別することにする。言語の基本的三機能とは、言語活動に参加する三つの要因を出発点とする。三つの要因とは、話し手、聞き手、およびその他の対象 (=コンテクスト) である。これらを志向する言語の機能が、それぞれ感情表現機能、喚起機能、および関説機能である (cf. Bühler: 28-29/33, Jakobson [c]:

22-24/188-191)。不定詞文を、感情表出機能を担うもの、喚起機能を担うもの、そして関説機能を担うものに分けて考えることにする¹。

(3-1) 感情表出機能

まず感情表出機能を担っている不定詞文についてであるが、これに関しては『Грамматика русского языка』が「不定詞 = 名指し文（инфinitивно-назывное предложение）」の単元で簡単な記述を与えており（『Грамматика русского языка』: 52-54）。そこでは、不定詞によって動作・状態が名指され、それに発話の際のイントネーションが加わることにより、不定詞文によって動作に対する話し手の評価が表されることが説明されている。その上で「不定詞=名指し文」は三つに下位区分されている。それは不定詞文によって、①「驚き（удивление）」、聞き手から一定の反応があることを期待した疑惑（недоумение）」、②事象に対する話し手の「否定的態度（неодобрительное отношение）」、あるいは動作の生起に対する「残念さ（сожаление）」、および③動作に対する「異議（протест）」、「落胆（разочарование）」、「憤慨（возмущение）」が表されるというものである。①から③のそれぞれにおいて、他の例と並んでチエーホフからの引用が挙げられている。
①: [Ольга] Ты сегодня невеселая, Маша. (Маша, напевая, надевает шляпу.) Куда ты? [Маша] Домой. [Ирина] Странно... [Тузенбах] Уходить с именин! [Маша] Все равно... Приду вечером. Прощай, моя хорошая... (Три с., 1: 124) [[オリガ]] あなた今日、浮かない顔をしているのね、マーシャ。（マーシャは歌いながら帽子をかぶる）どこへ行くの？
[マーシャ] 帰るの。[イリーナ] 変ねえ…。[トゥーゼンバフ]『名の日』のお祝いを逃げ出すなんて！[マーシャ]いいのよ…。夕がた出直します]。
②: [Аркадина] Ты не лечишься, а это нехорошо, брат. [Сорин] Я рад бы лечиться, да вот доктор не хочет. [Дорн] Лечиться в шестьдесят лет! [Сорин] И в шестьдесят лет жить хочется. (Ч., 2: 23)
[[アルカージナ]] あなたは治療をなさらない、いけないわ、兄さん。[ソーリン] 治療したいのは山々だが、このドクトルが、してやろうとおっしゃらん。[ドールン] 六十の治療ですか！[ソーリン] 六十になったって、生きたいさ]；
[Серебряков] Всю жизнь работать для науки, привыкнуть к своему кабинету, к аудитории, к почтенным товарищам — и вдруг, ни с того, ни с сего, очутиться в этом склепе, каждый день видеть тут глупых людей, слушать ничтожные разговоры... Я хочу жить, я люблю успех, люблю известность, шум, а тут — как в ссылке. Каждую минуту тосковать о прошлом, следить за успехами других, бояться смерти...

¹ この考え方には、Jakobson が命令法の形式（Jakobson 自身のことばでは「動作の恣意的波及を表す法」）の用法および形態を、関説機能と喚起機能に分けて説明していることに範を得ている（Jakobson [a]: 10/62-63）。

Не могу! Нет сил! А тут еще не хотят простить мне моей старости! (Д. В., 2: 77) [[セレブリヤコーフ] わたしは一生涯、学間に身をささげ、書斎になじみ、講堂に親しみ、れっきとした同僚たちと交際してきたものだ。それが突然、いつのまにやら、こんな墓穴みたいなところへ追いこまれて、来る日も来る日も、愚劣なやつらを見たり、くだらん話を聞かなければならんのだ…。わたしは生きたい、成功がしたい、有名になって、わいわい言われたい。ところが、ここてきた日にや、まるで島流しみたいなもんじゃないか。のべつ幕なしに、昔のことをなつかしがったり、他人の成功に気を病んだり、死神の足音にびくつたりする…。ああ、たまらん！ やりきれん！ だのにここの連中は、わたしの老後を、いたわってもくれないので！] ③: [Нина] (Полине Андреевне.) Отказать Ирине Николаевне, знаменитой артистке! (Ч., 2: 25) [[ニーナ] (ポリーナ・アンドレーエヴナに) イリーナ・ニコラーエヴナさんのような、有名な女優さんにさからうなんて！]

このように «Грамматика русского языка» では感情表出を伴う不定詞文が三つに下位区分されているが、しかし、これらの境界は明確ではない。明らかなのは、どの文にも非難の色彩が込められているということである。ここではこれらの区別を特にせずに、チエホフの戯曲に用いられている同様の例を挙げることにする。[Тригорин] Не понимаю, какая надобность. [Маша] Любить безнадежно, целые годы все ждать чего-то… А как выйду замуж, будет уже не до любви, новые заботы заглушат все старое. (Ч., 3: 33) [[トリゴーリン] わからんな。何の必要があつて。[マーシャ] 望みもないのに恋をして、何年も何年も何か待っているなんて…。いったん嫁に行ってしまえば、もう恋どころじゃなくなつて、新しい苦労で古いことはみんな消されてしまう]; [Маша] С вами связываться… (Ч., 4: 52) [[マーシャ] あなたたちと関わっていると…] (夫が帰宅するために父に馬を出すように頼んだが、それに答えようとしない父を見て言われるマーシャの台詞); [Войницкий] Разыграть такого дурака: стрелять два раза и ни разу не попасть! Этого я себе никогда не прошу! (Д. В., 4: 107) [[ヴォイニツキー] まったく、へまをやつたものだなあ。二度も撃ちながら、一発もあたらないなんて！ われながら愛想がつきたよ] (興奮してセレブリヤコーフ教授に向かって発砲してしばらくたったときのヴォイニツキーの台詞); [Маша] (Сердито, но так, чтобы не слышал муж.) Опять, черт подери, скучать целый вечер у директора! (Три с., 1: 134) [[マーシャ] (腹立たしげに、けれど夫に聞えないように) ええまた、一晩じゅう校長のところで退屈するのか、いやだ、いやだ!] (教師である夫クルイギンに、今晚、校長のところに行くと聞かされたときのマーシャの反応); [Андрей] Боже мой, я секретарь земской управы, той управы, где председательствует Протопопов, я секретарь, и самое большее, на что я могу надеяться, это – быть членом земской управы! Мне быть членом здешней земской управы, мне, которому снится каждую ночь, что я профессор московского университета, знаменитый ученый, которым гордится русская

zemlya! (Три с., 2: 141) [[Андрей]] いやはや僕は、市会のお雇い書記にすぎん。あのプロトポーポフが議長をしている、その役所のね。そこで、お雇い書記たる僕が抱きうる最大の希望といえば、つまり市会の議員になることさね！ 僕が、ここの市会の議員になるなんて！ やがてはモスクワ大学の教授、ロシアが誇りとする有名な学者、それを毎晩のように夢見ているこの僕がね！] ; [Маша] Мне кажется, человек должен быть верующим или должен искать веры, иначе жизнь его пуста, пуста... Жить и не знать, для чего журавли летят, для чего дети рождаются, для чего звезды на небе... (Три с., 2: 147) [[マーシャ]]わたし、こう思うの、人間は信念がなくてはいけない、少なくとも信念を求めなければいけない、でないと生活が空虚になる、空っぽになる、とね…。こうして生きていながら、何を目あてに鶴が飛ぶのか、なんのために子供は生まれるのか、どうして星は空にあるのか、こういうことを知らないなんて…] ; [Тузенбах] Здесь в городе решительно никто не понимает музыки, ни одна душа, но я, я понимаю и честным словом уверяю вас, Марья Сегреевна играет великолепно, почти талантливо. <...> Уметь играть так роскошно и в то же время сознавать, что никто не понимает! (Три с., 3: 161) [[トゥーゼンバフ]] この町には、全然だれも音楽のわかる人がいません、誰ひとりとしてね。しかし僕は、僕には耳がありますから、名誉にかけて断言しますが、マーシャさんは立派に、ほとんど天才的に弾かれますよ。[…] あれほど弾く腕をもちながら、しかも同時に、自分を誰も、誰ひとりわかつてくれないと、意識しなければならんとはね！] ; [Кулыгин] Разбить такую дорогую вещь – ах, Иван Романыч, Иван Романыч! (Три с., 3: 162) [[クルイギン]] こんな高価な物をこわすなんて。それ、イワン・ロマーヌイチさん、イワン・ロマーヌイチさん！] (イワン・ロマーヌイチが手にとって眺めていた陶器製の時計を落として壊し、周りの人が当惑したときのクルイギンの台詞) ; [Любовь Андреевна] (Целует брата, потом Варю.) Ну, идите спать… постарел и ты, Леонид. [Пищик] (Идет за ней.) Значит, теперь спать… Ох, подагра моя. Я у вас останусь… (Виш. с., 1: 211) [[リュボーフィ・アンドレーエヴァ]] (兄に、それからワーリヤにキスする) さあ、行っておやすみなさい…。あなたも老けたわね、レオニード。[ピーシク] (夫人のあとにつづく) 今度はオネンネというわけか…。ええ、この足痛風めが。今日は泊めていただきますよ…] (リュボーフィ・アンドレーエヴァに金はないと借金の申し込みを断られ、今度は彼女が寝るために寝室に向かおうとしていることを知ったピーシクの台詞) ; [Любовь Андреевна] Зачем так много пить, Леня! Зачем так много есть? Зачем так много говорить? Сегодня в ресторане ты говорил опять много и все некстати. О семидесятых годах, о декадентах. И кому? Половым говорить о декадентах! (Виш. с., 2: 218) [[リュボーフィ・アンドレーエヴァ]] おまけに、なぜあんなに沢山のむことがあるの、ええリョーリヤ？ なぜ、あんなにどっさり食べたり、しゃべり散らしたりすることがあるの？ 今日もあのレストランで、あなたは散々またおしゃべりをして、

それがみんな、とんちんかんだったじゃないの。七十年代がどうしたの、デカダンがどうしたって。しかも相手は誰だったの？ 給仕をつかまえて、デカダン論をなさるなんて】；[Любовь Андреевна] «Я выше любви!» Вы не выше любви, а просто, как вот говорит наш Фирс, вы недотёпа. В ваши годы не иметь любовницы!.. (Виш. с., 3: 235) [[リュボーフィ・アンドレーエヴナ]『恋愛を超越してる』ですって！ 超越するどころか、あんたはうちのフィールズの言うように、この出来そこねえめ、ですよ。その年をして、恋人ひとりいないなんて！…]

このように感情表出機能を担っている不定詞文は、不定詞により動作・状態が示され、それに対する発話者の態度がイントネーションにより付け加わるという過程により作り出されるのである。その際、不定詞が用いられるのは、不定詞が語彙的意味以外に叙法や時制といった付加的な文法的意味を担っていないためである。

(3-2) 喚起機能

次に喚起機能を担っている不定詞文を見ることにする。これは命令という意味となって現れる。命令の意味で用いられている不定詞文は、どの文法書でも記述されている（例えば『Русская грамматика』, т. 2: 374）。この場合、命令は通常「断固たる」ものである（『Грамматика русского языка』: 47）；[Сорин] (Вспылив.) Это нахальство! Это черт знает что такое! Мне это надоело, в конце концов. Сейчас же подать сюда всех лошадей! (Ч., 2: 25) [[ソーリン]（カッとして）理不尽にもほどがある！ 一体なんたることだ！ つくづくもう厭になったよ、早い話がな。即刻ここへ、ありったけの馬を出させるがいい！]（自分の家の家政を任せている支配人が姉のアルカジナに馬を出そうとしないのを見て発せられるソーリンの台詞）；[Наташа] Нам нужно уговориться, Оля. Раз навсегда... Ты в гимназии, я – дома, у тебя ученье, у меня – хозяйство. И если я говорю что насчет прислуги, то знаю, что говорю; я знаю, что го-во-рю... И чтоб завтра же не было здесь этой старой воровки, старой хрычовки... (стучит ногами) этой ведьмы!.. Не сметь меня раздражать! Не сметь! (Три с., 3: 160) [[ナターシャ]わたしたち、きっぱり話をつけておく必要があるわ、オーリヤ。あんたは学校づとめ、わたしは家のつとめ。あんたの仕事は授業で、私の仕事は家政だわ。だからわたしが召使のことを口に出す以上、自分の言いぶんはきちんと心得ていますよ。ちゃ・ん・と心得てね…。あすにもあのくたばりそこないの泥棒婆ア、追んだしてやる…（地だんだを踏む）あの鬼ばばあめ…！ この上おまえに、じりじりさせられるのはごめんだよ！ まっぴらだよ！]；[Наташа] (Строго.) Зачем здесь на скамье валяется вилка? (Проходя в дом, горничной.) Зачем здесь на скамье валяется вилка, я спрашиваю? (Кричит.) Молчать! [Кулыгин] Разошлась! (Три с., 4: 186) [[ナターシャ]（き

びしく) 何だってこのベンチの上に、フォークが転がっているんだい? (家へ上がりこみながら、小間使に) なんだってこのベンチに上に、フォークが転がっているんだと、訊いているじゃないか? (叫ぶ) おだまり! [クリイギン] そら、爆発した!]; [Маша] (Чебутыкину строго.) Только смотрите: ничего не пить сегодня. Слышите? Вам вредно пить. [Чебутыкин] Эва! У меня уж прошло. Два года, как запоя не было. (Три с., 1: 134) [[マーシャ]] (チェブトイキンに、きびしく) ただ、気をつけるんですよ、今日はなんにも飲まないようですね。わかつて? あなたは飲むと毒なのよ。[チェブトイキン] ええい! もういいんですよ、わたしは。二年というもの、深酒をしませんでしたからね]。

ただし命令の意味を伴った不定詞文が常に「断固とした」ものであるかというと、必ずしもそうではない; [Анфиса] (Подходя к Маше.) Маша, чай кушать, матушка. (Три с., 2: 148) [[アンフィーサ]] (マーシャのそばへ寄って) マーシャ、さあお茶ですよ、いらっしゃいまし]。アンフィーサは年老いた乳母であり、家の中では多少邪魔者扱いされているが、それでもこの三人姉妹の次女マーシャに対するこの台詞は、断固とした命令とはいえないであろう。また、行為者に発話者自身も含まれる場合、つまり勧誘が行われている場合にも不定詞文が使われることがある; [Войницкий] Господа, чай пить! (Д. В., 1: 66) [[ヴォイニツキー]] 皆さん、お茶ですよ]。これはお茶の準備が整っているところにセレブリヤコーフのたちが現れ、そこでヴォイニツキーが彼らに声をかけている場面である。

以上が喚起機能を担った不定詞文である。ここでも不定詞は動作・状態を名指しているのみで、不定詞文が命令を表すのは、あくまでもコンテクストや INTONATION に依っているのであり、また、同じくコンテクストや INTONATION によって命令にも「断固たる」ものからそうでないものまで、また事象に発話者が含まれない場合と含まれる場合など様々な変種が可能となるのである。また、喚起機能は普通は命令法の形式が担うわけであるが、不定詞が同機能を同形式の代わりに担うことができるのは、不定詞が語彙的意味以外の何ものも意味せず、命令法に対して無標項であるからであると言うことができる。

(3-3) 関説機能

圧倒的に大多数を占めるのが、関説機能を果たしている不定詞文である。これは個別的意味も多岐にわたっているので、基本的に «Русская грамматика» の既述に則して議論を進めることにする («Русская грамматика», т. 2: 373-374)。ただし忘れてはならないことは、不定詞によって表されている動作・状態は主体が主体的に行うものとして提示されているのではなく、程度の差はある、主体に与えられているものとして提示されているということであり、主体は動作・状態の「受け取り手」であるということである。

«Русская грамматика» における不定詞文の既述では、最初に「**不可避** (неизбежность)」

を表す不定詞文が挙げられている。その際、不定詞は *быть* であることが多いと付け加えられている。「不可避」の意味で用いられている不定詞文において、不定詞の表す動作・状態を与格対象が自分以外の何かから「受け取る」という事象構造を典型的な形で見ることができる。チエーホフにおいてこれに相当する例は以下のものである。[Аркадина] И у меня правило: не заглядывать в будущее. Я никогда не думаю ни о старости, ни о смерти. Чему быть, того не миновать. (Ч., 2: 21) [[アルカージナ] それにわたしには主義があるの、未来を覗き見しない、というね。わたしは、年のことも死のことも、ついぞ考えたことがないわ。どうせ、なるようにしかならないんだもの]; [Ирина] Я так решила: если мне не суждено быть в Москве, то так тому и быть. Значит, судьба. Ничего не поделаешь... Всё в божьей воле, это правда. (Три с., 4: 176) [[イリーナ] そこでわたし、急に決心したの、どうしてもモスクワへ行けないものなら、それでも仕方がない。それが運命なんだから、なんともなるものじゃない…。一切は神のみ心にある、ほんとうにそうだわ]; [Ольга] Все делается не по-нашему. Я не хотела быть начальницей и все-таки сделалась ею. В Москве, значит, не быть... (Три с., 4: 184) [[オリガ] 何ごとも、思い通りにならないものですわ。わたし、校長になりたくなかったんですが、でもやっぱり、なってしました。モスクワへは、つまりいけないというわけ…]。

次に «Русская грамматика» に挙げられている不定詞文の個別的意味は「**義務** (долженствование)」である。この意味においても、「不可避」の意味と同様に、不定詞の表す動作・状態とその「受け取り手」としての与格対象という意味構造がはっきりと感じられる。この例は非常に多い。[Тригорин] Вот я с вами, я волнуюсь, а между тем каждое мгновение помню, что меня ждет неоконченная повесть. Вижу вот облако, похожее на рояль. Думаю: надо будет упоминать где-нибудь в рассказе, что плыло облако, похожее на рояль. Пахнет гелиотропом. Скорее мотаю на ус: приторный запах, вдовий цвет, упомянуть при описании летнего вечера. (Ч., 2: 29) [[トリゴーリン] 今こうしてあなたとお喋りをして、興奮している。ところがその一方、書きかけの小説が向うで待っていることを、一瞬たりとも忘れずにいるんです。ほらあそこに、グランド・ピアノみたいな恰好の雲が見える。すると、こいつは一つ小説のどこかで使ってやらなくちゃ、と考える。グランド・ピアノのような雲が浮かんでいた、とね。ヘリオトロープの匂いがする。また大急ぎで頭へ書きこむ。甘ったるい匂い、暗い色、こいつは夏の夕方の描写に使わなければ、とね] (自分に憧れているニーナに向かって、作家であるトリゴーリンが創作のせわしなさを話して聞かせる台詞); [Нина] Жила я радостно, по-детски – проснешься утром и запоешь; любила вас, мечтала о славе, а теперь? Завтра рано утром ехать в Елец в третьем классе... с мужиками, а в Ельце образованные купцы будут приставать с любезностями. Груба жизнь!

(Ч., 4: 57) [[ニーナ] あのころのわたしは、子供みたいにはしゃいで暮らしていたわ。あさ目がさめると、歌をうたいだす。あなたを恋してたり、名声を夢みたり。それが今じやどう？ あしたは朝早く、三等に乗ってエレーツへ行くのよ…お百姓さんたちと合乗りでね。そしてエレーツじゃ、教育ある商人連中が、ちやはやと付きまとってくれるでしょう。むごいものだわ、生活って] (かつての恋人であるトレープレフと再会したときのニーナの台詞) ; [Войницкий] (Достает из стола баночку и подает ее Астрову.) На, возьми! (Соня.) Но надо скорее работать, скорее делать что-нибудь, а то не могу… не могу… [Соня] Да, да, работать. Как только проводим наших, сядем работать… (Д. В., 4: 109) [[ヴォイニツキー] (テーブルの抽斗から壇を出して、アーストロフに渡す) さ, 持っていきたまえ！ (ソーニヤに) ところで、早く働くじゃないか、一刻も早く、何か始めようじゃないか。さもないと、とてもこのままじゃ堪らない…とても駄目だ…。 [ソーニヤ] ええ、ええ、働きましょうね。お父さまたちが発つていらしたら、さっそく仕事にかかりましょうね…] ; [Астров] Что же ты не идешь проводить? [Войницкий] Пусть уезжают, а я… я не могу. Мне тяжело. Надо поскорей занять себя чем-нибудь… Работать, работать! (Роется в бумагах на столе.) (Д. В., 4: 113) [[アーストロフ] どうして見送りに出ないんだね? [ヴォイニツキー] このまま発つて行くがいいのさ。とても僕には…いや駄目だ。つらいんだよ。さ, 一刻も早く何かしなくちゃ…。仕事だ, 仕事だ! (テーブルの上の書類を引っかきまわす)] ; [Соня] Ну, дядя Ваня, давай делать что-нибудь. [Войницкий] Работать, работать… (Д. В., 4: 113) [[ソーニヤ] さあ, ワーニャ伯父さん, 仕事をはじめましょうね。[ヴォイニツキー] そう, 仕事だ, 仕事だ…] ; [Родэ] А Мария Сергеевна где? [Кулыгин] Маша в саду. [Федотик] С ней проститься. (Три с., 4: 173) [[ローデ] マリーヤ・セルゲーエヴナはどこです。[クルイギン] マーシャは庭にいます。[フェドーチク] その人にお別れを言わなくちゃ] ; [Дуняша] Я думала, что вы уехали. (Прислушивается.) Вот, кажется, уже едут. [Лопахин] (Прислушивается.) Нет… Багаж получить, то да се… (Виш. с., 1: 197) [[ドウニヤーシャ] お出かけになったとばかり思ってました。(耳をすます) おや, もういらしたらしい。[ロパーヒン] (耳をすます) ちがう…。手荷物を受けとったり, 何やかやあるからな…] ; [Варя] Поглядеть, все ли вещи привезли… (Виш. с., 1: 204) [[ワーリヤ] ちょっと見てみなくっちゃ, 荷物がみんな来ているかどうか…] ; [Лопахин] Мне сейчас, в пятом часу утра, в Харьков ехать. Такая досада! (Виш. с., 1: 204) [[ロパーヒン] わたしはこれからすぐ, 今朝の四時すぎに, ハリコフへ発たなければなりません。じつに残念です!] ; [Пищик] А все-таки, многоуважаемая, одолжите мне… взаймы двести сорок рублей… завтра по закладной проценты платить… (Виш. с., 1: 209) [[ピーシク] いや, それにしても奥さん…恐縮ですが貸してくださいらんか…二百四十ルーブリだけ…あす担保の利子を払わにやならんので…] ; [Пищик] Двести сорок рублей… проценты по закладной платить. (Виш.

c., 1: 211) [[ピーシク] 二百四十ルーブリ…担保の利子を払うんでね]; [Пищик] А я теперь в таком положении, что хоть фальшивые бумажки делай... Послезавтра триста десять рублей платить... (Виш. с., 3: 230) [[ピーシク] ところで現在わたしは、ええ一つ、にせ札でも作ってやろうか、といった土壇場でな…。あさって三百十ルーブリ払わにやならん…]; [Лопахин] (Поглядев на часы, в дверь.) Господа, имейте в виду, до поезда осталось всего сорок шесть минут! Значит, через двадцать минут на станцию ехать. Поторопливайтесь. (Виш. с., 4: 243) [[ロパーウィン] (時計を出してみて、ドアの口へ) 皆さん、よろしいですか、出車までに四十七分しかありませんよ！ すると、二十分したら停車場へお出かけになるわけです。少々お急ぎ願いますよ]。

以上の例の中にも「義務」の意味が非常に弱まっているものがあるが、次の例ではそれがさらに顕著である。[Елена Андреевна] И прекрасно. Любит или не любит – это не трудно узнатъ. Ты не смущайся, голубка, не беспокойся – я допрошу его осторожно, он и не заметит. Нам только узнать: да или нет? (Д. В., 3: 92) [[エレーナ] ほんとに、それがいいわ。好きか、好きでないか、それくらいのこと、すぐわかるもの。いいのよ、そんなにそわそわ心配しないでも。そっと遠まわしに、気取られないように聞くからね。イエスかノーか、それだけわかればいいんだもの] (医者アーストロフに対するニーナの気持ちを察し、ニーナに代わって、自分がアーストロフの気持ちを確かめると言っているエレーナ・アンドレーエヴナの台詞)。

«Русская грамматика» では、特に触れられてはいないが、不定詞が否定され、「警告」あるいは「禁止」の意味が生じている例がある。[Тузенбах] По-вашему, даже не мечтать о счастье! Но если я счастлив! [Вершинин] Нет. [Тузенбах] (Всплеснув руками и смеясь.) Очевидно, мы не понимаем друг друга. (Три с., 2: 146) [[トゥーゼンバフ] あなたの考えだと、幸福を夢見ることさえ相成らん、ということになりますね！ しかし、僕がいま幸福だとしたら！ [ヴェルシーニン] ええ、いけません。[トゥーゼンバフ] (両手をピシャリと打合せて、笑いながら) 要するにわれわれは、お互い理解ができないというわけですね] ; [Лопахин] Какую я вчера пьесу смотрел в театре, очень смешно. [Любовь Андреевна] И, наверное, ничего нет смешного. Вам не пьесы смотреть, а смотреть бы почаше на самих себя. Как вы все серо живете, как много говорите ненужного. (Виш. с., 2: 220) [[ロパーウィン] いや、きのうわたしが劇場で見た芝居といったら、じつに滑稽でしたよ。[リュボーフィ・アンドレーエヴナ] ちっとも滑稽じゃないのよ、きっと。あんたは芝居なんか見ないで、せいぜい自分を眺めたほうがよくってよ。なんてあんたの暮しは、不趣味なんでしょう、よけいなおしゃべりばかりして]。

また、修辞疑問文により、事実上「警告」あるいは「禁止」が示されている例がある。[Аркадина] Оставайся-ка, старик, дома. Тебе ли с твоим ревматизмом разъезжать по

ごstям? (Ч., 3: 35) [[アルカージナ] お年寄りは、ここにじつとしてらっしゃいよ。そんなリューマチのくせに、お客様に出あるく法があるものですか?]。

«Русская грамматика» で次に挙げられているのが、「**不可能**」の意味である。この場合、当然のことであるが、不定詞は *не* を伴う。[Аркадина] Чему быть, того не миновать. (Ч., 2: 21) [[アルカージナ] どうせ、なるようにならざるをえないんだもの]; [Астров] Моя пристяжная что-то захромала. Вчера еще заметил, когда Петрушка водил поить. [Войницкий] Перековать надо. [Астров] Придется в Рождественном заехать к кузнецу. Не миновать. (Д. В., 4: 114) [[アーストロフ] 僕の馬車のね、副え馬のやつが、どうやらびっこを引いているんだ。きのう、うちの御者が、水を飲ませに連れて行く時から、気がついていたんだがね。[ヴォイニツキー] 蹄鉄を打ち直すんだね。[アーストロフ] ロジジェストヴェンノエ村で鍛冶屋に寄って行かなくちゃなるまい。まあ仕方がない]; [Вершинин] Допустим, что среди ста тысяч населения этого города, конечно, отсталого и грубого, таких, как вы, только три. Само собою разумеется, вам не победить окружающей вас темной массы; <...> (Три с., 1: 131) [[ヴエルシーニン] まあ仮に、この町の十万の人口、それはもちろん、時代おくれな粗野な連中ばかりですが、そのなかに、あなたがたのような人は、たった三人だとします。言うまでもなく、あなたがたには、周囲の無知もうまいな群衆にうち勝つなどということは、とてもできますまい [...]]。

«Русская грамматика» では、不定詞文によって「可能」が意味されることはあるとされているが、それでも可能を表す例はある。[Аркадина] Оттого я и сохранилась, что никогда не была фефёлой, не распускала себя, как некоторые... (Подбоченясь, прохаживается по площадке.) Вот вам – как цыпочка. Хоть пятнадцатилетнюю девочку иргать. (Ч., 2: 22) [[アルカージナ] わたしがこうしていつまでも若くていられるのは、そこの連中みたいにぐうたらな真似をしたり、自分を甘やかしたりしなかったおかげですよ…。(両手を腰にあてて、コートを歩きまわる) ほらね、ピヨピヨ雛っ子よ。十五の小姑娘だって演じてみせるわ]。

「可能」、「不可能」を尋ねる疑問文、あるいは「許可」を表す不定詞文の例が、チエホフに見られる。[Андрей] Ты был когда-то в Москве? [Ферапонт] (После паузы.) Не был. Не привел бог. (Пауза.) Мне идти? [Андрей] Можешь идти. Будь здоров. (Три с., 2: 142) [[アンドレイ] おまえ、モスクワへ行ったことがあるかい? [フェラポント] (ちょっと間をおいて) ないでさ。そういうめぐり合わせでね。(間) もう帰っていいですかね? [アンドレイ] いいよ。ご苦労さん]。

次の例は «Русская грамматика» で「物理的認知あるいは知性的認知」の意味であるとされ、一つの項目が設けられているが («Русская грамматика», т. 2: 375), 「可能」、「不可

能」の枠組みの中での処理も可能であるように思われる。〔マasha〕 По-вашему, нет большего несчастья, как бедность, а по-моему, в тысячу раз легче ходить в лохмотьях и побираться, чем… Впрочем, вам не понять этого… (Ч., 1: 6) [[マーシャ]] あなたに言わせると、貧乏ほど不仕合せなものはないみたいだけれど、あたしなんか、ボロを着て乞食ぐらしをしたほうが、どんなに気楽だか知れやしないわ…。あなたには、わかってもらえそうもないけど…]; [Чебутыкин] Пора бы, кажется, уж… В половине первого, в казенной роще, вот в той, что отсюда видать за рекой… Пиф-паф. (Три с., 4: 177) [[Чебутыкин]] そろそろ、その時刻らしいがな…。十二時半に、ほらここから河向うに見える、あの官有林で…。ポンポンとな] (トゥーゼンバフとソリヨーヌイーの決闘についてのチエブトイキンの台詞); [Гаев] Это наш знаменитый еврейский оркестр. Помнишь, четыре скрипки, флейта и контрабас. <…> [Лопахин] (Прислушивается.) Не слыхать. (Виш. с., 2: 220) [[ガエフ]] あれは、この有名なユダヤ人の楽団だよ。ほら覚えてるだろう。バイオリンが四つに、フルートとコントラバスさ。[…] [ロパーヒン] (耳をすます) 聞こえないな…]; [Пищик] Видом видать, слыхом слыхать… (Виш. с., 3: 239) [[ピーシク]] いよう、これはこれは、ようこそご入来…] (待っていた人物がようやく現れたときのピーシクの台詞)。

«Русская грамматика» で次に挙げられているのが、「**不必要** (ненужность)」を表す不定詞文である。この用例はチエーホフの戯曲では一つのみであった。〔Аркадина〕 Ну, это у французов, может быть, но у нас ничего подобного, никаких программ. У нас женщина обыкновенно, прежде чем заполонить писателя, сама уже влюблена по уши, сделайте милость. Недалеко ходить, взять хоть меня и Тригорина… (Ч., 2: 22) [[アルカージナ]] ふん、フランスじゃそうかも知れないけど、このロシアじゃ、そんな目論見もへったくれもありやしない。ロシアの女はまず大抵、作家を手に入れる前に、自分のほうが首ったけの大あつあつになっちまう。いやはやだわ。手近なところで、たとえばこのわたしとトリゴーリンだっても…]。

さらに「**不許可** (недопустимость)」を表す不定詞文が挙げられている。«Русская грамматика» によると、「不許可」を表す不定詞文においては не … же という形がとられるとしている。実際、以下の 2 例がチエーホフに見出された。〔マasha〕 (Отцу.) パapa, позволь мужу взять лошадь! Ему нужно домой. [Шамраев] (Дразнит.) Лошадь… домой… (Строго.) Сама видела: сейчас посылали на станцию. Не гонять же опять. (Ч., 4: 52) [[マーシャ]] (父親に) パapa、うちの人に馬を出してやってちょうだい！ うちへ帰らなくちゃならないんだから。[シャムラーエフ] (口まねをして) 馬を…帰らなくちゃ… (厳格に) その眼で見たろう、今しがた停車場へ行って来たばかりだ。そそうこき使うわけにはいか

ん] ; [Серебряков] На что мне твой Астров? Он столько же понимает в медицине, как я в астрономии. [Соня] Не выписывать же сюда для твоей подагры целый медицинский факультет. (Д. В., 2: 77) [[セレブリヤコフ] お前さんのアーストロフなんか、わたしになんの用がある?あの男の医学の知識は、わたしの天文学ぐらいなところだろうて。[ソーニャ] まさかお父様の痛風のため、医科大学の先生総出で、来ていただくわきにもゆきませんわ]。

不定詞文により「**願望** (желательность)」が表されることがある。ここでも不定詞の表す動作・状態とそれの「受け取り手」である与格対象という意味構造に変化はない。不定詞文で表される「願望」は、主体の積極的な希望よりも、全体の状況である事象が可能となることを望むといった消極的なものであると言うことができる。[Тузенбах] Все равно... (Встает.) Я не красив, какой я военный? Ну, да все равно, впрочем... Буду работать. Хоть один день в моей жизни поработать так, чтобы прийти вечером домой, в утомлении повалиться в постель и уснуть тотчас же. (Уходя в залу.) Рабочие, должно быть, спят крепко! (Три с., 2: 147-148) [[トゥーゼンバフ] 同じこってですよ…。(立ちあがる) 僕は風采があがらんから、軍人にやむかんのです。まあ、同じことですがね、どっちみち…。僕は働きますよ。せめて一生のうちにいちんちでもいいから、うんと働いてみたいものだ。その晩うちへ帰ってくるなり、疲労のあまりベッドへぶつ倒れて、すぐさま高いびき、といった具合にね。(広間へ行きながら) 労働者はさだめし、ぐっすり眠るこったろうなあ!] ; [Варя] Фирс, ты о чем? [Фирс] Чего изволите? (Радостно.) Барыня моя приехала! Дождался! Теперь хоть и помереть... (Плачет от радости.) (Виш. с., 1: 203) [[ワーリヤ] フィールス, お前なに言ってるの? [フィールス] はい, 何と仰せで? (嬉しそうに) 奥さまがお帰りになりました! お待ち申した甲斐あって。これでもう, 死んでも思い残すことはありませんわい…。(嬉し泣きに泣く)]。

次の例における不定詞は、мечта を修飾しているとも言えるかもしれないが、不定詞文と解釈することも可能であろう。[Ольга] И в самом деле, за эти четыре года, пока служу в гимназии, я чувствую, как из меня выходят каждый день по каплям и силы, и молодость. И только растет и крепнет одна мечта... [Ирина] Уехать в Москву. Продать дом, покончить все здесь и – в Москву... [Ольга] Да! Скорее в Москву. (Три с., 1: 120) [[オリガ] そして実際、学校に勤めだしてから四年のあいだに、毎日一滴また一滴と、力や若さが抜けて行くような気がする。だんだん大きく強まって行くのは、空想だけ…。[イリーナ] モスクワへ行くといふね。この家を売って、きっぱりこの土地と手を切って、モスクワへ…。[オリガ] そうよ! 早くモスクワへねえ]。また、次の例においては、前半にある бы が後半の不定詞にも関係していると言えるかも知れず、本稿の分析対象からは除外してもよいかもしれません。

ないが、一応引用しておく。[Гаев] Это наш знаменитый еврейский оркестр. Помнишь, четыре скрипки, флейта и контрабас. [Любовь Андреевна] Он еще существует? Его бы к нам зазвать как-нибудь, устроить вечерок. (Виш. с., 2: 220) [[ガーエフ]] あれは、この有名なユダヤ人の楽団だよ。ほら覚えてるだろう。バイオリンが四つに、フルートとコントラバスさ。[リュボーフィ・アンドレエヴナ] あれ、まだあるの？ なんとかあれを呼んで、夜会を開きたいものね]。

不定詞文が「**条件** (условие)」を表すことがある。«Русская грамматика» ではそれを不定詞文とは認めていないが、*если* がなく、不定詞のみが条件節の主要成分になることがあるのは事実である。次の例は、主節が省略されている、条件節のみの文と理解することができる。[Аркадина] Недалеко ходить, взять хоть меня и Тригорина... (Ч., 2: 22) [[アルカジナ]] 手近なところで、たとえばこのわたしとトリゴーリンをとってみても…]。

挿入句に不定詞が用いられることがある。これは不定詞文ではないが、「条件」を表す不定詞文の亜種であるとみなすことができるので、ここでも一応挙げておくことにする。[Астров] Сильно я изменился с тех пор? [Марина] Сильно. Тогда ты молодой был, красивый, а теперь постарел. И красота уже не та. Тоже сказать – и водку пьешь. (Д. В., 1: 63) [[アーストロフ]] その時分から見ると、わたしも随分かわったろうねえ。[マリーナ] ええ、随分。あのころは、お若かったし、おきれいでもあんなすったけれど、今じゃもう、だいぶおふけになりましたよ。男前も、昔のようじゃないしねえ。なにしろウォトカをあがるからねえ]；[Дуняша] А мне, Ермолай Алексеич, признаться, Епиходов предложение сделал. (Виш. с., 1: 198) [[ドゥニャーシャ]] じつわね、エルモライ・アレクセイチさん、あのエピホード夫があたしに、結婚を申しこみましたの]；[Любовь Андреевна] Она вас любит, вам она по душе, и не знаю, не знаю, почему это вы точно сторонитесь друг друга. Не понимаю! [Лопахин] Я сам тоже не понимаю, признаться. (Виш. с., 4: 250) [[リュボーフィ・アンドレエヴナ]] あの子はあなたを愛していますし、あなたもあれがまんざらでもなさそうなのに、わからないわ、どうにもわからない、なぜあなたがた二人は、おたがい避け合うようなふうをなさるのか。わからないわ！ [ロパーギン] わたし自身も、じつはわからないんです]。

関説機能を担う不定詞文には、これまで見た「義務」や「願望」といった特殊な意味が薄れ、単に「**未来**」の動作・状態を表しているに過ぎないように思われるものが多くある。ただしその場合でも不定詞の表す動作・状態は行為者の主体的な行為というよりも、行為者に与えられたものであるという意味構造は感じられるように思われる。このような用法に関しては、私の知る限り、特別に文法書で触れられることはない。(Голос Аркадиной из

дому: «Борис Алексеевич!») [Тригорин] Меня зовут... Должно быть, укладываться. А не хочется уезжать. (Оглядывается на озеро.) Ишь ведь какая благодать!.. Хорошо! (Ч., 2: 31) [(家の中からアルカージナの声『ボリス・アレクセーエヴィチさん!』) [トリゴーリン]わたしを呼んでいる。きっと荷造りでしょう。だが、発ちたくないなあ。(湖の方を振返って) なんという自然の恩恵だ!…すばらしい!] ; (Тригорин записывает в книжку.) [Аркадина] Что ты? [Тригорин] Утром слышал хорошее выражение: «Девичий бор»... Пригодится. (Потягивается.) Значит, ехать? Опять вагоны, станции, буфеты, отбивные котлеты, разговоры... (Ч., 3: 43) [(トリゴーリン, 手帳に書きこむ。) [アルカージナ] なんですの, それ? [トリゴーリン] けさ, うまい言い方を聞いたもんでね。『処女の林…』だとさ。これは使える。(伸びをする) じゃ, 出かけるんだね? また汽車か, 停車場, 食道, カツレツ, おしゃべり…]; [Аркадина] А теперь пойдемте закусить чего-нибудь. Наша знаменитость не обедала сегодня. После ужина будем продолжать. (Сыну.) Костя, оставь свои рукописи, пойдем есть. [Треплев] Не хочу, мама, я сыт. [Аркадина] Как знаешь. (Будит Сорина.) Петруша, ужинать! (Ч., 4: 55) [[アルカージナ] じゃあちらで, 何かちょっと頂きましょう。うちの有名な先生は, 今日は夕飯ぬきでしたからね。お夜食のあとで, またやりましょう。(息子に) コースチャ, 原稿はやめて, 食堂へ行きましょう。[トレイプレフ] 欲しくないよ, ママ, おなかがいっぱいだから。[アルカージナ] ご勝手に。(ソーリンを起こす) ペトルーシャ, お夜食ですよ!] ; [Марина] Опять заживем, как было, по-старому. Утром в восьмом часу чай, в первом часу обед, вечером – ужинать садиться; все своим порядком, как у людей... по-христиански. (Д. В., 4: 106) [[マリーナ] これでまた, もとどおりの暮しができるわけさね。朝は八時にお茶。十二時すぎにはお昼。暮がたには晩の食事。ばんじ世間の人さまみなみに…きちんとやってゆけますよ]; [Кулыгин] <...> Устал. Жена домой пошла? [Ирина] Должно быть. [Кулыгин] (Целует Ирине руку.) Прощай. Завтра и послезавтра целый день отдыхать. Всего хорошего! (Три с., 2: 156) [[クルイギン] …] くたびれた。マーシャは, うちへ帰ったのかな? [Ирина] そうよ, きっと。[クルイギン] (Иринаの片手にキスする) さよなら。あすも, あさっても, 一んちじゅう休めるんだ。ご機嫌よう]; [Любовь Андреевна] Идемте, господа. Скоро ужинать. (Виш. с., 2: 227) [[リュボーフィ・アンドレエヴナ] 行きましょうよ, 皆さん。そろそろお夜食よ]; [Любовь Андреевна] О мой милый, мой нежный, прекрасный сад!.. Моя жизнь, моя молодость, счастье мое, прощай!.. Прощай!.. <...> В последний раз взглянуть на стены, на окна... По этой комнате любила ходить покойная мать... (Виш. с., 4: 253) [[リュボーフィ・アンドレエヴナ] ああ, わたしのいといしい, なつかしい, 美しい庭!… わたしの生活, わたしの青春, わたしの幸福, さようなら!… さようなら!… … […] お名残りにもう一度, 壁を見て, 窓をながめて…。亡くなつたお母さまは, この部屋を歩くのが

お好きだったわ…。] (手放すことになった自分の家を去る直前のリュボーフィ・アンドレーエヴナの台詞)。

«Русская грамматика» では、不定詞文が「願望」および「妥当性」の意味に加え、「主体がすぐに取りかかる」という意味が表されることがあると説明され、次の例が挙げられている («Русская грамматика», т. 2, 374)。[Дорн] (Нине, которая подходит.) Как там? [Нина] Ирина Николаевна плачет, а у Петра Николаевича астма. [Дорн] (Встает.) Пойти дать обоим валериановых капель… (Ч., 2: 26) [[ドールン]] (近づいて來たニーナに) どうです。あちらの様子は? [ニーナ] イリーナ・ニコラーエヴナさんは泣いていらっしゃるし、ピョートル・ニコラーエヴィチさんはまた喘息よ。[ドールン] (立ち上がる) どれ行って、カノコ草の水薬でも、ふたりに飲ませるか…]; [Ирина] Вот я и дома, наконец. <...> (Садится в кресле.) Отдохнуть. Усталा. (Три с., 2: 144) [[イリーナ]] やっと、うちに帰れたわ。[…] (肘かけ椅子にかける) ひと休みしなくちゃ。くたびれたわ]。

一方、「Грамматика русского языка」では Пойти дать обоим валериановых капель… が「疑念 (сомнение)」を表す不定詞文に分類されている («Грамматика русского языка»: 45)。同様の例がチエーホフには他にも見られた。(Горничная подходит к Наташе и шепчет ей на ухо.) [Наташа] Протопопов? Какой чудак. Приехал Протопопов, зовет меня покататься с ним на тройке. (Смеется.) Какие странные эти мужчины… (Звонок.) Кто-то там пришел. Поехать разве на четверть часа прокатиться… (Горничной.) Скажи, сейчас. (Три с., 2: 155) [[ナターシャ]] (小間使がナターシャへ歩み寄って、耳打ちする) プロトポーポフだって? 変わりもんだわねえ。プロトポーポフがやって来て、一緒にトロイカでドライブしようって、わたしを呼んでるのよ。(笑う) 男って、ほんとに妙だわね…。(呼鈴の音) また誰か来たわ。じゃ、ほんの十五分ほど乗ってこようかしら…。(小間使に) すぐ参りますって言つとくれ]。

また、次は疑問文の例である。[Маша] Не повторить ли нам? [Тригорин] А не много ли будет? [Маша] Ну, вот! (Наливает по рюмке.) Вы не смотрите на меня так. Женщины пьют чаще, чем вы думаете. Меньшинство пьет открыто, как я, а большинство тайно. (Ч., 3: 33) [[マーシャ]] いかが、もう一つ? [トリゴーリン] 過ぎやしないかな? [マーシャ] なあに、平気! (一杯ずつつぐ) そんなに人の顔を見ないでください。女というものは、あなたの考えていらっしゃるより、よく飲みますわよ。わたしみたいに大っぴらにやるのは少ないけど、こっそり飲むのは大勢いますわ]。

結語

以上の検討から次のことを結論とすることが適當であるように思われる。二項対立の原

理に関する既存の基準が適用困難であっても、少なくとも不定詞とそれ以外の形式において二項対立の原理は機能している。不定詞はあくまでも動詞の語彙的意味のみを表しているのであり、それに対して不定詞以外の形式は語彙的意味に加えて何らかの文法的意味をも表すのである。また不定詞文における個別的意味の多様性は二項対立の原理と、与格の使用および具体的場面の相互作用に起因する。

今後の課題として、第一に、より広い資料にあたる必要性を挙げることができる。今回は資料をチェーホフの戯曲に限定して二項対立の原理の妥当性を検討したが、ここに不定詞文のあらゆる用法が含まれているとは考えにくい。また第二に、今回は不定詞とその他の形式という形態論レベルに存在する二項対立の原理が、不定詞文という統語論レベルの意味に影響を及ぼしていることが確認されたわけであるが、形態論レベルの二項対立が言語の他の領域に影響を及ぼすことはないのかという点も興味深い課題として残されている。

文 献

- Брицын В.М. Синтаксис и семантика в современном русском языке. Киев, 1990.
- Виноградов В.В. Русский язык. 3-е изд. М., 1986.
- Грамматика русского языка. Т.2. Ч.1. М.:АН СССР, 1960.
- Пешковский А.М. Русский синтаксис в научном освещении. 7-е изд. М., 1956.
- Русская грамматика. Т.1-2. М.:АН СССР, 1980.
- Русская грамматика. Т.2. Akademia Praha, 1979.
- Тимофеев К.А. Об основных типах инфинитивных предложений в современном русском литературном языке // Виноградов В.В. (ред.) Вопросы синтаксиса современного русского языка. М., 1950. С. 257-301.
- Шахматов А.А. Синтаксис русского языка. Изд. 2-е. Л., 1941
- Bühler, K. *Sprachtheorie, Die Darstellungsfunktion der Sprache*. 1934. (邦訳：カール・ビューラー著、脇阪豊、植木迪子、植田康成、大浜るい子共訳『言語理論——言語の叙述機能——』上巻、クロノス、1985年)
- Croft, W. *Typology and Universals*. 1990.
- Jakobson, R. [a]. "Zur Struktur der Russischen Verbums." In: Jakobson, R. *Selected Writings, II*. 1971. pp.3-15. (邦訳：米重文樹訳「ロシア語動詞の構造について」『ローマン・ヤーコブソン選集1』大修館書店、1986年)

- Jakobson, R. [b]. "Beitrag zur allgemeinen Kasuslehre: Gesamtbedeutungen der Russischen Kasus." In: Jakobson, R. *Selected Writings, II.* 1971. pp.21-71. (邦訳: 米重文樹訳「一般格理論への貢献」『ローマン・ヤーコブソン選集 1』大修館書店, 1986 年)
- Jakobson, R. [c]. "Linguistics and Poetics." In: Jakobson, R. *Selected Writings, III.* 1981. pp.18-51. (邦訳: ローマン・ヤコブソン著, 中野直子訳「言語学と詩学」『一般言語学』みすず書房, 1973 年)
- 中澤英彦「ロシア語のシンタクシスにおける不定形について——名詞に付属する不定詞の用法を中心として——」『東京外国語大学論集』第 38 号, 1988 年, 253-260 頁。

Об инфинитивных предложениях

КАТО Сатоси

Р. Якобсон применяет понятие маркированности / немаркированности (понятие бинарной привативной оппозиции) при описании употреблений форм глагола. По его мнению, инфинитив (например, *читать*) как немаркированный член оппозиции противопоставлен финитным формам (*читаю, читай, читающий* и т. д.) как маркированным членам. Это определение членов оппозиции, однако, противоречит критериям, которые выдвигает У. Крофт по поводу определения маркированных и немаркированных членов. Если применить критерии Крофта к оппозиции инфинитив / финитные формы, то получится, что инфинитив — маркированный член оппозиции, а финитные формы — немаркированные. Автор статьи разделяет позицию Якобсона, в качестве доказательства правоты которого в настоящей статье рассматривается употребление инфинитива. Особое место при этом отводится инфинитивным предложениям.

Автор настоящей статьи предполагает, что семантическая природа членов данной оппозиции такова: 1) инфинитив выражает только лексическое значение глагола, а финитные формы представляют, кроме лексического, и грамматические значения; 2) такие модальные значения в инфинитивных предложениях, как неизбежность, долженствование, (не)возможность, и т. д., не свойственны инфинитиву как таковому, а возникают в результате

взаимодействий инфинитива, с одной стороны, и имени существительного в дательном падеже с учетом контекста, с другой.

В качестве примеров, подтверждающих правильность данного предположения, анализируются инфинитивные предложения, которые встретились в пьесах А. П. Чехова «Чайка», «Дядя Ваня», «Три сестры» и «Вишневый сад». Отобранные инфинитивные предложения рассматриваются на основе предложененной К. Бюлером классификации функций языка — экспрессивной, апеллятивной и репрезентативной.